

学校の運動部活動における体罰の再生産に関する考察

A Study on the re-production of violent punishment in sports club activities in school Corporal punishment

1K10C163-3 小池田太郎

主査 作野誠一 先生

副査 深見英一郎 先生

【研究背景及び研究目的】

これまで学校の運動部活動における体罰問題は何度も取りざたされてきたが、2013 年現在ほど社会問題になったことはないだろう。その原因の一つとして、桜宮高校のバスケットボール部員が指導教師の体罰を苦にし、自殺したという事件がある。この事件以来、政府が運動部活動に関するガイドラインをより細かく制定し、多くの有識者が体罰に関する議論を交わしてきた。議論の中でも、元読売ジャイアンツの桑田氏は一貫して体罰を否定してきた。彼が 2010 年に現役プロ野球選手に行ったアンケートでは、83%の選手が体罰に対して賛成の立場であることが分かった。しかし、このデータは被体罰経験者が体罰を肯定しているのかは不明であった。もし、被体罰経験者が、そうでない人よりも体罰を肯定するならば「体罰の再生産」があるということになる。

体罰を根絶させるためには、この「体罰の再生産」を食い止める必要があるだろう。では、運動部活動において体罰を行うのは誰か。それは、「指導教師」である。よって、教職志望の学生並びに教職志望でない学生のデータを取り、体罰の再生産の現状を明らかにすることで新たな提言をすることを本研究の目的としたい。

【方法】

本研究では、文献研究のほか質問紙調査により「体罰の再生産」を考察するための調査を行う。質問紙調査では、教職志望と教職志望でない大学生 120 名に被体罰経験者と体罰を受けたことがない者に分け、体罰の賛否を問うた。集計後は、クロス集計によって考察を行った。

【結果と考察】

まず、本研究での運動部活動体罰調査で「体罰を受けた理由」について質問したところ、生徒指導を目的とした体罰よりも、勝利至上主義を理由に体罰を行っていることが把握できた。さらに、「体罰を受けての感情」を問うたところ、反発心を持つ者もいるが、体罰にどこか諦めの気持ちや否定的な気持ちを持つものが多く、「気合が入った」など肯定的に捉える者は少なかった。

そして、本研究の核である「教職志望の学生における体罰の再生産」については、「教職志望の学生は、教職志望でない学生に比べて体罰を肯定する学生が多い」という結果になった。ただし、筆者が参考にした「体罰の再

生産」を示した高橋ら(2008)や楠本ら(1998)の研究よりも体罰肯定者自体の割合が少なかった。つまり、有意差が認められ、「体罰の再生産」が確認されても、体罰を肯定する人は減少し、否定する人は増加してきているということである。この結果は、昨今体罰が大きな社会問題となり、体罰を否定することが当たり前となりつつある現在だからこそ、こうした結果になったのだと推測できる。

しかし、「体罰の再生産」が確認できた以上、体罰肯定者の割合が減少したところで、体罰は根絶してはいかないだろう。こうした結果から、教職志望の学生は体罰に関する知識を今以上に持つことが望ましいだろう。

【結論と提言】

本研究では、「教職志望の学生の方が教職志望でない学生よりも体罰を肯定する割合が高い」と分かった。つまり、「教職志望の学生に体罰の再生産」があることが認められた。では、体罰の再生産を無くし、体罰を根絶させるためにはどうすれば良いのだろうか。このことから筆者は、大学の教職カリキュラムで体罰に関する授業の量を増やし、質を高めることを提言する。そして、そのカリキュラムでは体罰否定の立場になるよう授業を進めていく。確かに、「体罰肯定派の意見も聞くべきだ」という意見も存在するが、肯定派の意見を聞いたときに、体罰肯定派になる者も存在し、結果体罰が根絶していかないのではないだろうか。

また、今回の調査で体罰否定派の者に理由を尋ねたところ、「大学での授業を踏まえて否定した」と答えた者はいなかった。「体罰の再生産」が起きているということは、大学の教職課程で体罰＝禁止事項ということを植えつけられていないのだろう。それならば、大学の教職課程で体罰＝禁止事項という考えを植えつけければ、体罰肯定派がいなくなり「体罰の再生産」も無くなるだろう。これは、結果として体罰の根絶にもつながっていくのではないだろうか。

以上のことから、大学の教職課程で、体罰に関するカリキュラムを増やすとともに、その授業内で体罰を否定することを植えつけることで、「体罰の再生産」強いては体罰が根絶されるのではないかと考える。